

平成 24 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

大阪府立で唯一の視覚障がいの支援学校であるという自覚のもと、培ってきた視覚障がいの専門性を維持・継承し、専門教育を実践する。全国の視覚障がい教育のリーダーとしての責任を果たす。

1. 幼児・児童・生徒の一人ひとりを大切にしたい学校
2. 府内における視覚障がい教育のセンター的機能を果たす学校
3. 教職員が教育者としての高いプロ意識をもった学校

2 中期的目標

1. 幼児・児童・生徒の一人ひとりを大切にしたい教育を推進する。
 - (1) 新しい学習指導要領が導入されることと併せて、幼児・児童・生徒の多様な進路に応じた教育課程を編成する。
 - (2) 個別の教育支援計画・個別の指導計画の様式や運用方法を見直し改善を図る。また、平成 25 年度までに指導要録への運用まで含めて、電子化を図り、学校全体で共有化する。
 - (3) 小・中・高における重複障がいのある児童・生徒の割合が 6 割を超えている現状で、視覚障がいの専門性に加えて、自立活動に視点をおいた教育の充実をめざす。
 - (4) 小・中・高・専と一貫したキャリア教育をめざす。中でも増加している重度重複の児童・生徒一人ひとりに応じた実習先・進路先の開拓と進路の実現をめざす。
 - (5) 視覚障がいの教材・教具の開発に努める。特に「タブレット型 P C」の活用を図る。中期計画推進費により校内に無線 LAN の環境を整備し、タブレット型 P C を活用した学習環境づくりをめざす。
 - (6) 安全安心な学校づくりをめざし、大震災をはじめとする危機に対する体制整備を図る。
2. 視覚障がい教育のセンター的機能を果たす。
 - (1) 府内の視覚障がいのある幼児・児童・生徒の支援に努める。府内の視覚障がいのある子どもを担当する教員のネットワークとしての大阪視覚障がい教育研究会の活動の充実を図る。インクルーシブ教育の理念のもと視覚障がいのある子どもを支援する体制を整備する。
 - (2) 早期教育の充実のため、地域の保健・医療・福祉と連携し、早期からの視覚障がい教育のリーダー的役割を果たす。
 - (3) 音楽科を中心とした活動は、本校の教育の柱の一つとしている。幼・小・中・高と一貫した情操教育のもと、本校の理解啓発のために地域の演奏活動に積極的に参加する。
 - (4) 視覚支援学校の歴史資料の整理をし、視覚支援教育のライブラリーとしての役割を果たす。
3. 教職員が教育者としてのプロ意識をもち専門性の向上を図る。
 - (1) 学部を超えた教科別研究会の充実を図り教科指導の専門性を継承する。特に O J T 等で専門性の向上を図る。
 - (2) 毎年、歩行訓練士養成事業に教員を派遣して歩行訓練士の育成を継続する。
 - (3) 点字講習会への参加者を増やし、教職員全体の点字の専門性を向上させる。
 - (4) 特別支援学校教諭免許状（視覚障がい者に関する教育の領域）の取得率を、現在の 36% から平成 28 年度までに 50% 以上にする。
 - (5) 常に教職員の人権感覚の点検をして、幼児・児童・生徒の人権を尊重した教育を進める。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 24 年 10 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>○ 対象及び回収率 (H24/H23) 「児童(小)・生徒(中)(高)・学生(専)」(82%/64%)、「保護者・保証人」(85%/74%)、「教職員」(77%/72%)</p> <p>○ 質問のカテゴリー 昨年度と異なるもの(学校生活、保護者・保証人との連携、児童・生徒理解、教育課程、学校運営)と昨年度と同じもの(進路、生徒指導、授業、人権教育、学校安全)の 10 のカテゴリー</p> <p>※ 昨年度より回収率が上がった。質問数を精選したことや授業アンケートとの同時実施などが理由と考えられる。</p> <p>○ 主な結果と分析</p> <p>※ 学校生活：児童・生徒の 7 割は、学校に行くことを楽しみにしているが、専修部では授業や実習が厳しいと否定的評価が見られる。授業改善や行事等の工夫を図りたい。</p> <p>※ 保護者との連携：学校からの情報提供は、教職員のほとんどは肯定的評価だが、保護者は 1～3 割が分からないと答えている。情報提供の取組みを徹底させたい。</p> <p>※ 児童・生徒理解：保護者・教職員の 7 割は、児童・生徒の障がいについて理解できていると答えているが、特に 4 割の中学部生徒自身が否定的に捉えている。各部の連携を一層密にして、情報の共有化を図りたい。</p> <p>※ 進路：中学部では取組みが評価され肯定的評価が増えている。逆に専修部では評価は少し減っている。就職環境が厳しいためと考えられるが、一人ひとりのニーズに応じたきめ細やかな進路指導に取組みたい。</p> <p>※ 人権教育：専修部では、学生の否定的評価が 1 割減り、肯定的評価が 2 割増えた。昨年度の結果を受けて、人権について考える機会を増やした結果だと考えられる。</p>	<p>第 1 回 (11/21)</p> <p>○ 今年度の学校協議会について</p> <p>※ 会議の内容を保護者も知りたいと思っている。保護者に還元する方法を考えてもらいたい。</p> <p>※ 地域の方がホームページ等を見て、傍聴を希望されるかもしれない。委員としても、協力していきたい。</p> <p>○ 平成 24 年度学校経営方針及び学校概況について</p> <p>※ 100 周年を契機に、同窓会活動が広がってほしい。</p> <p>※ 新校舎建設に伴う計画外敷地は、視覚障がい者にとって有効に使えるようお願いしたい。今後の 100 年を見通して、視覚障がい者のコミュニティを大事にしていくスタンスでお願いしたい。</p> <p>○ 学校協議会への意見書について</p> <p>※ 今回投書のあった意見は、個別対応が適当と思えるので、学校の方で適切に対応してください。</p> <p>○ 進路指導について</p> <p>※ 理療科の就労先として医療機関も視野に入れ、指導していけばいいのではないか。マッサージ業界としても協力したい。</p> <p>第 2 回 (2/19)</p> <p>○ 学校教育自己診断について</p> <p>※ 年齢・障がいの状態等が多岐にわたっているので、自由筆記で書いてもらう方がリアルに掴み易いのではないだろうか。</p> <p>○ 授業アンケートについて</p> <p>※ 生徒数が少ないので、一人ひとりの意見が重みを持つ。視覚支援学校は体験や専門性が求められるので、しっかりと研修をしてほしい。</p> <p>○ 学校評価について</p> <p>※ 小学部から専攻科までのそれぞれの児童生徒の実態に応じた情報教育 (ICT 活用) を、さらに進めてほしい。</p> <p>○ 学校経営方針について</p> <p>※ センター的機能はインクルーシブ教育へと繋がるから、地域の視覚障がい教育を担当する教員を育てる視点で取り組んでほしい。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 一人ひとりを大切に した教育の推進	(1) 重複障がいのある児童生徒の充実 ① 自立活動研究部の活動の充実 ② 特別な配慮を要する児童・生徒の検討委員会の活性化 (2) 教材・教具の研究 ③ 情報管理教育部の活動支援 ④ 全国点字競技会の主管校	① 自立活動研究会を中心にADLチェックリストを作成し、全教職員が活用できるようにする。 ② 特別な配慮を要する児童・生徒の検討委員会は2年目を迎える。ようやく組織でその重要性を認識しはじめている。個々の特別な配慮の内容を確認し、その対応も含めて関係教職員で確実に情報を共有化する。さらには、緊急時に速やかな対応がとれる体制をつくる。 ③ 「タブレット型PC」の活用を図る。校内に無線LANの環境を整備する。各学部の実践をとおして学習環境の改善を図る。具体的な実践をまとめ、その成果を全国レベルでの研究会で発表させる。 ④ 11月に全国盲学生点字競技大会が開かれる。この主管校として、校内に新たに委員会を設置する。この協議会の運営を通して学校全体で点字の専門性を見直す機会にする。	① ADLチェックリストが完成する。 ② 緊急時の対応マニュアルを教職員が共有する。 ③ 全日盲研で発表し、ホームページでも発表する。指導できる教員が増える。生徒が実際に学習に活用している。 ④ 全国盲学生点字競技大会の円滑な運営ができ、アンケート等で評価をうける。	① 自立活動研究会を中心にADLチェックリストは2学期で試行が終わり、次年度から実施に向け、最終の検討に入っている。次年度は、全教職員で重複障がいのある生徒の指導に活用したい。(○) ② 障がいの重複化に伴い、特別な配慮を要する幼児・児童・生徒の健康管理に対する委員会は2年目を迎え、教職員間で情報を共有して適切に対応できている。今後も委員会は継続し、健康管理の徹底を図りたい。(○) ③ 校長マネジメント推進事業中期計画推進費によりタブレット型PC、電子黒板、無線LAN等の環境整備は終えた。教職員が主体的に活用できるようなマニュアルづくりの準備を進めている。(○) ・ タブレット型PCの活用事例をHPに積極的に公開している。注目度も高く、国内の大学や外国からの訪問があった。(◎) ・ 文部科学省主催の「国内のICT教育活用好事例の収集・普及・促進に関する調査研究事業」研究発表会や東京大学等が中心になって取り組まれている「魔法のじゅうたんプロジェクト」報告会で発表した。また、来年度の全日本盲学校教育研究大会での発表が決まった。(◎) ・ 次年度は指導できる教員を増やし、児童生徒が、教材・教具としてあたりまえに活用できているようにしたい。 ④ 全国盲学生点字競技大会に主管校として30名ほどの教職員体制で取り組み、無事終了した。学校としても問題作成、採点などの業務を通して、教職員個々の点字の専門性が確実に向上した。また、学部を超えて準備することで、学校全体として点字指導を見直す良い機会になった。(◎) ・ 全国盲学生点字競技大会において、総合部門で最優秀の学校賞を本校が受賞した。生徒の頑張りや教職員の専門性の成果である。(◎) ・ 今後、校内で評価を集約して、次期主管校に引き継ぎたい。
2 センター的機能	(1) 地域貢献 ① 大阪視覚障がい教育研究会の在り方を検討 (2) 障がい者理解 ② 音楽科を中心とした活動 ③ 全国盲学校野球大会の運営	① 地域で生活する幼児・児童・生徒を支援するためには、地域で担当する教員の専門性の向上が必要である。そのために、大阪視覚障がい教育研究会の参加者を増やす。また、大阪視覚障がい教育研究会の研究内容の充実を図り、求心力を高める。 ② 地域での演奏活動を生徒指導の一環と捉えるとともに、本校の教育の理解推進を図る。そのために、校内組織としての支援体制をつくる。 ③ 全国盲学校野球大会の主管を本校が務める。その運営を円滑に進めるとともに、全盲野球を通して障がい者理解啓発を進める。	① 大阪視覚障がい教育研究会を3回開き、それぞれの参加率が60%を超える。 ② 演奏活動を実施し、アンケート等で評価を受ける。 ③ 全盲野球の支援者を増やす。ボランティア数、Tシャツの販売数等が指標になる。	① 1回目を8/7に29名、2回目を1/30に43名で開催した。日程の関係で研究会は2回に終わった。(△) ・ インクルーシブ教育システム構想では地域の教育資源のネットワークが重要な要素である。それゆえに、この研究会は継続し、活性化を図らなければならない。 ② 大型商業施設でのコンサート3回、ライオンズクラブでのコンサート、公共ホールでの招待演奏、音楽コンクールへの出場(入賞)など、積極的に音楽活動に取り組んだ。これらの活動は、生徒のスキルアップとともに、本校の理解啓発に貢献した。(◎) ・ 6回目を迎えたジョイフルコンサートは、今年も盛況であった。観客アンケートでも高い評価を受け、地域からの本校への期待を感じた。特に47名の教職員と5名の生徒で結成した合唱団は素晴らしかった。教職員にも充実感があり、地域の中の学校という意識を強く感じた。(◎) ・ 次年度も活動は継続する。 ③ 全国盲学校野球大会の主管を務め、無事終了した。全ての教職員が組織を意識して個々の役割を果たすことで、学校組織の活性化が図れた。(◎) ・ 共に主管をした市立視覚特別支援学校との連携はさらに深まった。(◎) ・ 高校生による大会マスコットやポスターデザインコンクール、開会式での赤星選手(元阪神)の参加、Tシャツを記念品とする協賛活動、企業等からの協賛、そして教育委員会の協力など多くの方から支援を受け、障がい者理解は確実に広げることができた。(◎) ・ 全盲野球での全国優勝を勝ち取ったことは、選手の自信につながり、教職員や他のクラブ活動の選手の刺激になった。盲バレーボールは近畿大会で準優勝、水泳は近畿大会で42枚もの表彰状を得た。(◎)

府立視覚支援学校

<p style="text-align: center;">3 教育者としての資質向上</p>	<p>(1) 専門性の維持・継承は本校の責務である。一人ひとりの教職員はプロ意識をもって専門性の向上に努めなければならない。</p> <p>① 歩行訓練士養成事業への派遣 ② 点字講習会の参加促進 ③ 教科における専門性の継承</p>	<p>① 歩行訓練士養成事業へ半年間派遣し、教育支援室のスタッフとして育成する。 ② 点字講習会を長期休業中や放課後などに設置することなく、時間割に組み込み、参加しやすい環境づくりをする。2年目にあたり、グループを2つに分けて拡大する。さらに点字技能士の試験を受けるものがでてくれば支援する。 ③ 学部を超えた教科別研究会の充実を図り、教科指導の専門性を継承する。特に、英語・数学・理科の教科においては、チームティーチングで教員間での育成を図る。</p>	<p>① 歩行訓練士の資格を得る。平成 25 年度の候補者を決める。 ② 点字講習会の参加者が 15 人以上となる。 ③ 英語・理科・数学の点字教材が完璧に作成できる。</p>	<p>① 歩行訓練士養成事業へ派遣していた教員は半年間の訓練を終了し、最後の校内での実習をしている。児童・生徒を指導する教員に対して支援するという形で入り、研修の成果を活かしている。(◎) ・ 次年度も継続する。派遣教職員は決まった。 ② 点字講習会を時間割に組み込み、専門性を向上させる枠組みを仕掛けて 2 年目になる。参加者は 8 人で少なかったが、点字技能士に合格する教員も出た。点字講習会の目標になった。現在、本校で計 4 名が資格を有する。(○) ・ 次年度も定期的な学習会を設定する。参加者を増やし、目標をもって点字の専門性を継承したい。 ③ OJTにより教科指導の専門性の継承を続けた。 ・ 英語と数学の点字においては、先輩教員の指導のもと次世代の教員も熱心に取り組み、見通しが持てるようになった。(◎) ・ 幼小学部においては、「触察」をテーマにして授業研究を続けた。(◎) ・ 11/24に「科学へジャンプ」を実施する。これは視覚障がい教育の授業力を高める全国的な取組みで、本校が近畿地区の主管となり、本校を会場として実施した。本校からも理科の教職員を中心に 30 人参加した。大学の先生や他校の優れた教員の授業に接し、参加した教員の授業力を向上させる貴重な研修の機会になった。(◎) ・ 次年度も「科学へジャンプ」の主管校を引き受け、授業力向上のための研修の機会としたい。</p>
--	---	---	--	--